学位授与番号	医博甲第1447号
学位授与年月日	平成12年12月31日
氏　　名	谷口桂三
学位論文題目	内視鏡下リンパ系マッピングによる胃癌リンパ節転移診断の精度 －胃癌センチネルリンパ節の同定－
論文審査委員	主査　教授　三輪晃一 副査　教授　渡邊　剛 　　教授　磨伊正義

内容の要旨及び審査の結果の要旨

胃癌センチネルリンパ節同定のための、パテントブルーを用いた術中内視鏡下リンパ系描出法(intraoperative endoscopic lymphatic mapping, IELM)の精度を検討した。早期の胃癌124例に、手術直前または術中に胃内視鏡を通じ、癌巣周囲4カ所に2% patent blue をそれぞれ0.2mlずつ粘膜下注射し、開腹下で胃漿膜面に描出される胃癌のリンパ系を観察した。染色リンパ流域は、胃の動脈系に沿っており、左胃動脈、右胃動脈、左胃大網動脈、右胃大網動脈、後胃動脈の5領域に分類された。リンパ流が描出され、かつリンパ節が染色された症例は117例で、成功率は94%であった。染色リンパ節をすべて生検した後、胃癌を切除し、郭清リンパ節のすべてを病理組織学的に永久切片で鏡検した。IELMによる染色リンパ節個数は最多16個、最小1個、中央値6個で、郭清リンパ節個数は、1症例あたり39個であった。染色リンパ節の転移診断の感受性は91%(20/22)、特異性は100%(95/95)、正診率は98%(115/117)であった。染色リンパ節に1個だけ転移を認めた症例が、7例(32%)あった。2例の偽陰性は、大きさが1.5cm以上で、肉眼所見で転移リンパ節と診断できる症例で、リンパ流は描出されたが転移リンパ節が染色されなかった。しかし、リンパ流域と転移陽性リンパ節の部位を対比すると、転移のあったリンパ節はすべて染色されたリンパ流域に存在した。高い正診率そして高頻度の染色リンパ節への単独転移は、IELMにより染色されるセンチネルリンパ節が胃癌の最初に転移するリンパ節であることを示した。以上の成績より、早期の胃癌症例へのIELMによるセンチネルリンパ節生検は、切除胃癌のリンパ節転移の有無を正確に判定できる有用な診断法であり、リンパ節郭清の縮小あるいは拡大の信頼できる指標になりうると結論した。

本研究は、胃癌手術のリンパ節郭清に重要な示唆を与える貴重な研究と評価された。